

災害後の留学継続の判断要因 —短期留学生の場合—

小笠恵美子

要旨

東日本大震災の後も帰国せずに日本での生活を続けたり、一時帰国したものの一カ月ほどで日本に戻ったりして日本語の学習を継続した交換留学生 4 人にインタビューをした。地震当時の経験から、日本での留学を継続するに至ったインタビュー当時までの経緯をインタビューし、地震後、原発の状態も不安定で余震も頻発する中、なぜ、日本留学を継続することにしたのか、M-GTA の分析手法を使って探った。その結果、出身、地震後の行動も全く異なる 4 人であるが、各自が、共に日本において自分を精神的に支える友人を持っていたこと、貴重な留学期間を日本で過ごそうと自分で決断したこと、被災地を応援する日本人の姿勢への共感を培っていったことが窺えた。

キーワード

留学継続、情報、日本に対する共感、自己肯定感

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日の地震、およびその後続く福島第一原子力発電所(以下原発とする)の事故は、日本人のみならず世界に衝撃を与え、海外でも様々な報道がなされた。地震当時日本に留学していた外国人学生は、直接被災した東北地方在住者のみならず首都圏在住者も地震の衝撃を受け、その後は余震、物資や電力の不足、原発事故による放射能汚染の不安を体験した。このような状況の下、多くの留学生が国元や受け入れ機関から帰国を勧告されたが、2011 年 5 月の時点で、全国の大学で受け入れている留学生の 96%が大学の通学圏内に在住していることが確認されている(文部科学省 2011)。

筆者は日本語教育に携わっているが、勤務校うち 1 校では、日本語教育プログラムに参加していた 29 人の交換留学生のうち 27 人が帰国した。日本での学習によって学位を取得するという目的があるわけでもなく、日本での経済基盤(住居、アルバイトなど)も少ない交換留学生はその多くが帰国したと思われる。その一方で、わずかではあったが地震を経験し、留学の受け入れ先の大学からも派遣元の大学からも帰国勧告が出ているにも関わらず帰国しなかったり、一時帰国したもののすぐに日本に戻って学生生活を再開したりした学習者もいた。これらの留学生が日本滞在の継続を選んだ理由は何だったのだろうか。本稿では留学生がどのようなプロセスを経て「留学を継続している今」に至ったかを明らかにし、留学生にとって留学生活がどのような意味があるのか、留学生の受け入れ機関は留学生の今後の生活支援として何を必要とする必要があるのかを改めて考察する。

2. 調査方法

本調査では留学生に対する半構造的インタビューを行い、その後修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下 M-GTA、木下 2003)の手法で分析した。半構造的インタビューを行ったのは、インタビューの時点で先入観なく留学継続の理由を知るために、インタビュー対象者に自由に語らせることが重要であると考えたからである。松本・小笠(2011)、松本(2011)では、インタビュー結果を留学生一人一人の語りを時系列でストーリー化することで留学継続に至るプロセスを示したが、語り全体を通して感じられた、インタビュー対象者に共通する留学継続を決定させる事象を表すことはできなかった。そこで、対象者を集団として解釈しようとする M-GTA の手法で分析した。これはデータに密着した調査手法であるため、ここで得られた概念や理論は「普遍性を志向し広く一般化できる性質のものではなく、分析に用いたデータに関する限りという限定つきのものとなる。」(木下 2003, p. 26)とされている。しかし、研究対象者が少なくてもデータに密着してその解釈を示せることから、留学を継続した短期留学生が経験した心のプロセスを説明する上で有効であると考えられる。

2.1 インタビュー概要

インタビューは都内の私立大学 2 校の交換留学生 4 人を対象に行った。この 4 人は、筆者が勤務する大学で震災後も日本に居続けた者 2 名と、一時帰国したものの 1 カ月以内で日本に戻って留学生生活を再開した者 2 名である。松本・小笠(2011)では短期、長期を含めて 4 人の留学生(そのうち短期留学生の 2 名は本調査でも対象としている)へのインタビュー結果を示したが、その調査において、短期留学生と長期留学生とでは、日本滞在の理由に差異がみられた。そこで、2011 年 5 月当時に筆者がアクセスできる、東日本大震災を経験した短期留学生全員に対してインタビューを行った。人数が少なく、所属機関が限られているため、その機関の傾向(受け入れている留学生が少人数であること、対象留学生が寮生活をしていることから学校からの支援が受けやすい、留学生同士が互いによく知っていて連絡を密に取っているなど)が結果に影響することが予想される。

授業以外に 10 分から 30 分間時間を取ってインタビューしたい旨を申し入れ、筆者と 1 対 1 でインタビューを行った。インタビューは、地震当時からその後の混乱時に経験した状況、その後の帰国(あるいは日本滞在)に至るまでの状況とその理由、地震後の日本に対するイメージ、今日本で学習を続けている事情を中心に質問をし、インタビュー対象者の語りを促すように心がけた。

インタビュー対象者の概要を表 1 に示す。

表 1 インタビュー対象者

留学生(性別)	K(女)	I(女)	O(女)	N(男)
出身国	フィリピン	イギリス	ドイツ	アメリカ
滞在予定期間	1 年間	1 年間	1 年間	6 か月
一時帰国の有無	無	有	有	無
インタビューの時間	18 分 24 秒	20 分 26 秒	15 分 15 秒	40 分 15 秒

対象者のうち 2 人は一時帰国後、5 月の新学期開始(インタビュー対象者達の学校は地震対応のため、新学期の開始時期を 1 カ月遅らせた。)に合わせて再来日しており、2 人は地震後も帰国せず日本で生活を続けていた。対象者の出身はフィリピン、イギリス、アメリカ、ドイツである。

2. 2 分析手法

M-GTA は社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に優れた理論である(木下 2003, p. 89)とされている。災害時、留学生は今までに経験したことの無い社会的状況にさらされ、それぞれの持っている情報や周りの人の態度をもとに自身の留学継続を決定していった。決定に至るまでにどのような社会相互作用があったかを明らかにし、災害時の留学生の行動の説明と今後同様の事態が生じた際の行動の予測が可能になる方法として、M-GTA が適していると考えた。この方法は、データを解釈した結果を概念とよび、それを分析の最小単位としている。そして、概念間の関係を示すことを通して人間の行動のプロセスを明らかにしようとしている。

分析ではインタビューデータから概念を生成し、各概念間の関係を一つずつ検討してカテゴリーとして図にしていく。このカテゴリーは、インタビュー対象者の今に至るまでのプロセスがどのような動きとして説明されるかを示す。概念生成の際には、表 2 のような分析ワークシート⁽¹⁾を用い、データから得られる概念と、その定義、概念生成のもととなった具体例を記録する。具体例はヴァリエーションの欄に記録し、対極の例や、解釈の思考プロセスを理論的メモに記録する。

表 2 分析ワークシートの例

概念	パニックにならない日本人からの影響
定義	大丈夫に見える現状を報道よりも信じる
ヴァリエーション	心配していない、大丈夫と思った。よく友達と話した。スカイプでとか、電話する、they say, it's fine, it's O.K. (I) 私たちは外に行ったので、みなさん、日本人は普通、生活していたので、安全と思いました。(N) 東京は今大丈夫そうでしたからパニックにならなかった。(O) なんか、どの情報があるか分からなくて、とりあえず東京にいました。(K)
理論的メモ	(地震当時)あ、日本人もパニックしている、私もパニックしようかな(K)① ずっと CNN ニュースや日本のニュースをテレビで見ていた。(K)② 時たま寮で仲いい子は話すチャンスがあるけどそんなに長くないです。私は大丈夫と思った。私は変かも。(K)③ News and TV, they say really really different. We didn't know what happens in Japan. It's hard to make that (日本に戻るかどうか)のdecision. (I)④ 地震があってもそこで生活を続ける日本人の現状からの影響。例えば、寮の部屋に閉じこもってテレビを見ている学生はとても怖がっていたが、街に出て子どもとサッカーをした N は、「日本人が普通に生活をしていましたので、安全と思いました」と言い、日本人の態度が自分の態度に影響した語りをしている。

例えば、本研究で生じた概念【パニックにならない日本人からの影響】を生成する際には表 2 のようなワークシートができる。理論的メモの細字部分は思考プロセスの記述であり、太字部分は、概念の対極となる例で、これらの理論的メモはその他の概念生成の際に

もう一度考察の対象となる。①では、Kは「パニックしている」と言っているが、その後の語りで、実際には地震直後に大きな混乱もなくその場の全員が運動場に避難していて、大きなパニックにはなっておらず、Kもそれに倣っていることがわかった。②④は【理解できるツールによる情報収集】、③は【自分で決めたという自負】という概念生成を補助する例と考えた。

3 分析

3.1 概念とカテゴリーの関係

上記のような分析プロセスを経て10の概念を生成した。これらの概念はデータから直接的に浮かび上がるものであり、留学継続の理由との関連性がみえにくいものもある。そこで更に概念間で深く関係のありそうなものを統合して関連性を説明しうるカテゴリーを生成した。以下、概念は【】、カテゴリーは〈〉で示し、留学生達の心理プロセスを説明する。表3に概念とカテゴリーの関係を示す。

表3 概念とカテゴリーの関係

カテゴリー	概念
〈安心を得るための情報収集〉	【災害時の対応は日本人に倣う】 【パニックにならない日本人からの影響】 【理解できるメディアからの情報収集】
〈留学の意志の強化〉	【日本にいる(いようとする)友人との精神的な支え合い】 【計画したことは完遂したい】 【2度とない機会を逃したくない】
〈自己肯定感〉	【自分で決めたという自負】 【自分は逃げていないという自信】
〈日本に対する共感〉	【日本人と一緒に応援】 【日本の良いイメージの確認】

3.2 留学継続を決定する概念の生成

以上のような概念とカテゴリーは次のような筆者の解釈を経て生成された。

地震当初、首都圏にいて地震を直接体験した留学生は、それぞれ今までにない体験の中で、周りの日本人の様子を見て自分の行動を決定している。「机の下に行った方がいいかと思ったけど、周りの日本人が外に出て、日本人の方が地震に慣れているからその通りにした方がいいだろうと思って外に出た(0)」など、【災害時の対応は日本人に倣う】判断をしている。しかし、少し状況が落ち着くと、各自自分の判断で寮に帰る、一日経って街に出るなどの行動をとり、「私は外に行ったので、みなさん、日本人は普通、生活していたので、you know、安全と思いました。(N)」 「東京は全然大丈夫そうでしたからパニックにならなかった(0)」というように【パニックにならない日本人の影響】から落ち着きを取り戻した様子が窺える。また、日本人の様子を見る一方で自分の理解できるメディアにも積極的にアクセスして情報を得ている様子も語られている(【理解できるメディアからの

情報収集】の概念を生成)。その結果、いろいろな報道に触れても「なんか、どの情報があるのか分からなくて、とりあえず東京にいました(K)」という判断もみられた。

日本滞在、あるいは日本へ戻る判断の際に精神的な支えとなったのは、経験を共有する友人と連絡を取り合うことだった。地震後、少し落ち着いた時点で、日本にいる友人にアクセスしている。地震発生時、岐阜県の高山地方に旅行中だったIは、地震の報道に触れて「あー、怖い、怖い、友達電話した、心配した(I)」と、すぐに地震に遭った友人に思いを馳せている。地震後一時避難先からアパートに帰る際に友達に電話をしたかった(「…パニックにはならなかったけど、ちょっと友達と話したいと思った。(O)」)、不安を忘れるためにあえて友人と遊びに出かけた(地震の3日後、友達と渋谷にカラオケに行った。「皆怖い、だと思ふ。それだからこそ、これ(カラオケをして楽しむことを)しよう」と(K)、「…(友達との連絡が)とても役に立ちました。皆いるだけ、それだけで安心できた(K)」)など、それぞれの状況によって友達に連絡をする際の事情は異なるが、共に非常時に相手を気遣ったり、行動を共にしたり、話をしたりしており、【日本にいる(いようとす)友人との精神的支え合い】をしていたことを裏付けている。イギリスに一時帰国した留学生Iはイギリスにいる間に、自分と同様に一時帰国した韓国人留学生(Iと同時期に再来日)とスカイプで話をしたと言っていた。その留学生も日本に戻ると言っていたのかという筆者の問いに、「はい。She was thinking but she was not sure. We both said “When you go back?” “I don’t know” “When you go back?” “I don’t know”, kind of trying to decide. K(本調査のインタビュー対象者の1人。KとIは同じ大学に通っている。Kは地震の後、帰国せず日本に居続けた。) was always here(I)」と語り、日本で経験を共有した友人とのつながりを保ち、留学の途中であることを意識し続けていることが窺える。

友人の支えと共に、学生自身の【計画したことは完遂したい】という思いが地震によって確認された。Iは今までにいくつかの言語を学習しては途中で止めるということを繰り返してきたからもう途中でやめるということをしたくないといった説明をして、「I want to finish this. Earthquake is a good reason to give up learning Japanese, but I want to fight for it (I)」と語った。その他、「最後まで終わる、終わりたいから、この1年(K)」「私も授業続けたいです。日本語、日本文化、日本の歴史、あー、まだない。So 日本に残りたいです。(N)」「とりあえずこの一年間の留学を最後までやりたいと思った。(O)」などが、強い調子で語られ、プログラムを完遂することに大きな意義を感じている様子が語られた。

上記の、日本での留学生活に対して抱いた【計画したことは完遂したい】という思いは、留学生生活を【2度とない機会を逃したくない】ものとして認識する様子とともに確認された。留学生活について、「I think this is never happen this opportunity again, this kind of 学生。I would never do that again, and I have 5 month left(I)」、「9か月ここにいて、すごく、日本語の勉強になったし、成長したし、本当にいろいろな友達もできて、ここに、クラスがすごく好きで(O)」といった言葉で、地震が起きるまでの数ヶ月間で留学生達は自身の成長を感じて、それを続けたいという思いや、今までのプログラムで満足を感じており、それが途中で打ち切られたくないという思いを語った。また、留学のチャンスはいつでもあるものではなく、このチャンスを逃したら、日本で学生として生活

するという経験はもう二度とできないだろうという思いから継続を決めた者もいた。特にフィリピンからの留学生は、一度帰国するともう一度チケットを取ることは難しいという経済的理由もあったようだ。「帰ったらきっと（日本に）戻りたくなるから、戻ったらチケットとかもう買えない(K)」と語り、帰ることで留学のチャンスを捨てたくないという気持ちと、日本で生活を維持したいという気持ちを示している。

国の親や、所属機関が帰国を勧告する中、日本滞在を決断したことを留学生達は【自分で決めたという自負】をもって受け止めている様子が窺える。決断に至る理由を聞くと、Kは「私は少し変かも」と言いながら、「大丈夫と思った」と自分で生活していけるという自信を感じさせる発言をしている。その他「It's kind of, it is really hard to decide(I)」「親は大人だから自分で決めてと言われた(0)」というように自分で判断したことを強く感じさせる発言や「長崎と広島を勉強しました。私は放射能を研究しました(N)」という、自分の知識への自信を感じさせる発言があった。Iは多くの外国人が日本を去る中、地震後に一緒にアメリカ旅行をした日本人の友人が日本に帰っていき、自分はイギリスに一時帰国するという経験をし、その経験について「maybe biggest one I found was a kind of guilty」いい、その友人と別れるときにとっても気持ちが悪かったことを語った。この語りは「I want to be royal to Japan. Yeah, to show, like がんばれ日本、like people are buying 福島野菜、魚」と日本人と一緒に日本を応援する気持ちを示す語り続く。この一連の語りから、Iも日本の友人と共に今日本にいることを選んだ自分に対して【自分は逃げていないという自信】を持っている様子が窺える。

Iの語りは、同時に【日本人と一緒に応援】する気持ちを示している。そのほか、「がんばろう日本、一カ月そればかり。友達と会ったらがんばろう日本って、それ、口癖になっちゃった(K)」と日本全体が地震から立ち直ろうとする様子を、単に感嘆するだけでなく、「口癖になった」というように自身も応援する言葉を口にして、応援する一員になっている発言もあった。

また、地震後に日本のイメージが変わったかという筆者の質問に対して「日本のイメージが確認されたかな。皆すごく困っていても…協力して相手を応援して、なんかスピリットが…なんかすごいと思いました(0)」と語っており、(今までもっていた)【日本のよいイメージの確認】が概念化された。0は「(国の大学を卒業したら)できるだけ早くここに戻って来たい」とも発言しており、IやKと同様〈日本に対する共感〉が窺える。

3. 3 各概念の関係

図1は地震発生から「留学を継続している今」に至るプロセスを表す。図中の二重線の四角の中は留学継続の判断に関わる語りの中で語られた概念及びカテゴリーであり、白い矢印は「留学継続の意思」と強い結びつきを示す。点線の四角の中は、震災時や現在の自分の置かれた状況や、日本に対するイメージのなどの語りで見られた概念及びカテゴリーであり、黒の矢印は「留学継続の意思」との緩やかな結びつきを示す。

すなわち、留学生達は災害発生時に、パニックになっていない日本人を見て、「(日本にいても)大丈夫だと思」い、その後、日本で生活していても大丈夫か確認するために多くのメディアから情報を得ている。しかし日本滞在の安全を保証する情報は得られず、日本滞在、再来日を決定することになった。そして、確固とした情報は得られないままだった

が、共に日本滞在を続ける友人の存在や、2度とない留学の機会を最後までやり遂げたいという思いが留学の意思を支えている。また、安全を理由に帰国することに罪悪感を覚えたこともあり、留学継続を決心して日本に滞在していたインタビュー当時は、友人と共に日本に居続ける自分を、自分の意思を貫き、計画を完遂するものとして肯定的にとらえている様子が窺えた。こうした、〈留学の意思を支える要因〉と〈自己の肯定感〉は、留学継続の意思をより強固なものにしている。

また、多くの外国人が国外へ避難する中、日本人と同様に日本に居続けることは、逃げ場のない日本人との一体感を留学生達に感じさせ、被災地を応援する〈日本への共感〉を感じさせた。この感情もまた、留学継続を肯定的にとらえてその意志を強固にする役割を担っている。

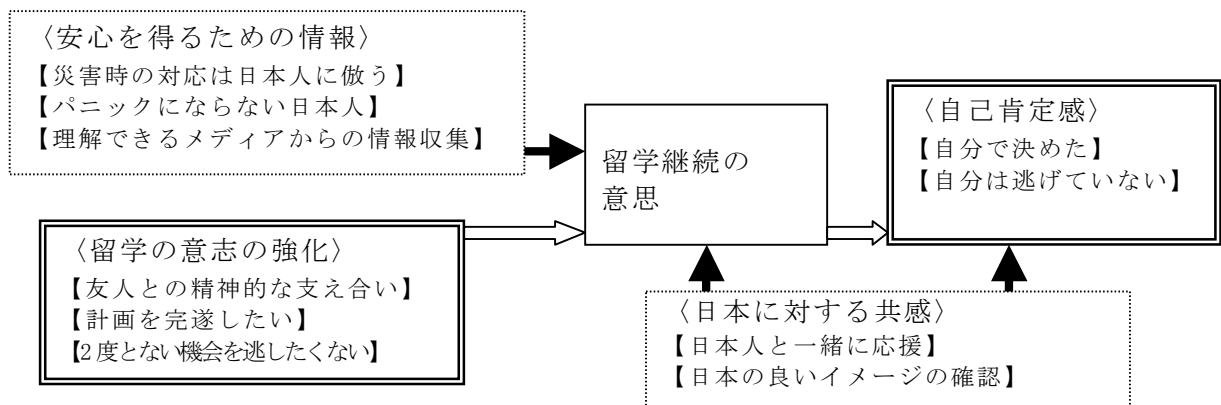


図1 概念間の関係

3. まとめ

以上のようにインタビュー調査と M-GTA による分析によって、筆者の接した、首都圏の短期留学生達が、災害後にも留学継続を判断したプロセスが明らかになった。

以上のように留学生は情報を求めて周囲の日本人に倣い、メディアにアクセスしていることがわかる。留学生を受け入れる側としては、留学生の無事を守るために非常時の連絡方法を確保する方策を考え、できるだけ早く正確な情報を発信するとともに、必要であれば一時帰国を勧告するという方策をとることが必要であろう。その一方で、災害教育や、非常時に連絡を取り、支え合えるような人間関係形成に寄与するプログラムなどを留学生に提供することも重要である。

留学生活は彼らにとって、【計画したことを完遂】させ【2度とない機会】を生かす場であり、それらは不安なときに連絡を取り合う【友人との精神的な支え合い】の基盤の上にあるということが今回のインタビューを通して窺えた。加賀美・簗口・瀬口・奥田(1999)でも、被災して、混乱のうちに帰国した外国人留学生が、その後何らかの形で再来日しており、その理由は「(神戸にいる人たち)信頼関係があるから」(p. 102)と記している。今回の調査同様、留学期間中に結ばれた人間関係の重要性を示す記述である。

短期留学であっても、留学生達はその間に日本の社会との関係を築き、日本社会に共感を覚えている。このような留学生が作り上げた精神的支えは、災害があってもなお日本に来ようと思う学生を育成する一助となるだろう。このような人間関係の形成はどのような

形が理想的であるかを簡単に決めることはできないが、受け入れ機関関係者は、その機会を作っていくことに積極的であるべきであろう。

(小笠恵美子 おがさえみこ・東海大学)

注

1. 分析ワークシートとは修正版 M-GTA で取られている概念生成の際に使われるワークシートである。木下(2003)では、「データのある個所に着目し、その意味を解釈して概念の生成を始める(p.177)」と説明している。

参考文献

- 加賀美常美代・簗口雅博・瀬口郁子・奥田順子(1999)『阪神・淡路大震災における被災外国人学生の支援活動と心のケア』ナカニシヤ出版
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 松本明香(2012)「何が留学継続を決定させたのかー東日本大震災後に留学生に行ったインタビューよりー」『東京立正短期大学紀要』40号(印刷中)
- 松本明香・小笠恵美子(2011)「震災後の日本で留学を継続する背景ー留学生へのインタビューを通してー」『日本語教育方法研究会誌』Vol.18、No.2、p.34-35
- 文部科学省(2011)「東日本大震災に伴う外国人留学生(大学、専修学校)の在籍・就学状況について(平成23年7月1日現在)」
- http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1310541.htm (2012年2月22日アクセス)